地中海

MARE MEDITERRANEUM

2018.11

平成30年11月1日発行（毎月1回1日発行）第66巻第11号 No.726

創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の郷愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生史的なものだ。別ないいかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下しまた北上した、すべての未開なものを同化してきた大きな力、――それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みなおなじ気持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

地中海

二〇一八年十一月号（通巻七二六号）

◇今月の二十首詠……為せば成る　白子れい　2

■作品 A

A　奥田清和・大浪美雪他　4

B　青田不二子他　28

C　綾　央子他　54

A　小川良子他　68

A　鈴木三津子他　84

■オリーブ集　宮崎　功・矢口さた他　48

◇今月の二人　佐藤　昌・橋場　節　16

私と短歌との出会い（195）　蒲原清美　19

■小林能子歌集『計算尺とゴジラ』批評　松崎健一郎　20

夕暮れに思う人生

人の心に寄り添う歌　奥田陽子

■船田敦弘歌集『平城讃歌』批評　牧　雄彦　24

憧れの世界

わが魂はかもめとなりて　浜谷久子

香川進の生きものの歌　1　田土成彦　15

■歌壇月旦　玉井綾子　67

『滑走路』という歌集

◇シルクロード・カフェ　（資任編集）木村文子　46

■九月号作品批評　74

A……近藤芳仙・篠原まり子

田中富子・金近敦子

B……横田敏子・高津砂千子

C……柴田登志恵・中島彰代

オリーブ集…松浦禎子・坂上直美

今月の二人・作品評　久我田鶴子　18

最近の歌誌より　〔編集部〕　73

支社・グループ掲示板　（鹿児島支社）　ばばりょうこ　101

近内静子歌集『山鳩』出版を祝う会　報告　大寺智子　102

クリップ……104　神田通信……表3

（表紙デザイン）Tazuko Kuga

為せば成る

白子　れい

昭和二年生まれ。
洛東グループ所属。
歌集に『疏水のほとり』『霜のみち』
がある。

着物にて出かくることの多くなり足袋はく機会ともにふえたり

白足袋をはく都度目立つ外反拇趾杏き少女の日の甦りくる

放課後をはしり走りて日暮れまで空腹の日々ほっそり痩せいし

おそいくる睡魔とたたかい幾何問題解きしとは夢　ノートに涎

満洲事変、支那事変のただ中にありて食糧、衣服なべてに事欠く

制服も靴も配給時代にてスパイク学校にただの一足

陸上の県代表に選ばれしは女学校一年十四歳なりき

ひと夜かけ夜行列車にて東京へ十四歳のわれの旅立ち

父ははの許をはなれてはじめての旅は全国大会参加
学校にただ一足のスパイクにわが足つめ込み走りき明治神宮外苑
女学校一、三年とスパイクに足ねじ込みて親指変型
戦いの烈しくなりて全国大会中止となりたり四年生のとき
親指の四十五度に傾くも痛くはあらじ日々歩みおり
かえらざる日を生きいると気付かずて前へ前へとただ唯走りき
あの頃より七十余年経し今もなお外反拇趾のままなりわが足
まきもどす記憶のなべてなつかしき苦しかりしも飢えいし日々も
もう年齢と甘くなるとき「為せば成る」かの日の父の声の立ちくる
「為せば成る」父の一語に励まされ今日まで来たりこころ萎ゆる日
生かされて生き来て庭の花ばなをめずるこの日のわれの幸せ
今日もまた外反拇趾を白足袋につつみて出でん研究会へと

作品 A

奥田清和　戦後七十年　・大

神前の誓ひ忘れず添ひ遂ぐる忍耐とみに失せゆくあはれ
三界に家なしとききしをみならの代はうつりゆく自我の目覚めに
教職につきたる孫に伝へゐる京の竹道すずめのお宿
玉音放送血気にはやる将校は軍刀かざし自決をせまりし
さかしらに裏花道を行きし人戦後の生きのその後を知らず
織姫の里の古城の櫓風猛暑にもだえひそと鎮もる
国敗れ芋づる食みてしのぎゐし戦後七十年窓の大花火

大浪美雪　煙の花　・森

雨の午後山椒の実のさみどりを煎りとともに煮つめゆきたり
はじかみとゆかしき名前山椒の青き実一粒辛きもからし
誰やらと問わず語りをするように雨音のする時折り高く
梅雨寒むにココナツオイルの固まりぬ心ほぐして温もりたきに
放棄田は緑みどりの芦原にギョギョシギョギョシとヨシキリの鳴く
「もやもやと煙のような花でしょう」教えくれしは桂子姉様
今年またけむりの花が咲きました　告げるすべなく空を見上ぐる

奥田陽子　ゾーン　・羊

未経験ゾーンに入るとぞ警告のむなしきまでに日の照りわたり
湯のなかを泳ぐがごとく帰り来てシャワー音今はもどかしきまで
じりじりと照りつけるなか音無くて死にたる街と思う時のあり
無造作に夏のバッグに入れられて満員電車の蜀黍の旅
繰り返す夏の驟雨によみがえり北のベランダの蕾ふくらむ
コンクリにあお向けの蝉手に取れば鳴きて飛び立つ雲なき空へ
海青く映されてあり首長竜くは戦死にも似て沖縄の夏

小野雅子　自転車　・羊

明けてゆく空を背負ひて全力で自転車を漕ぎ人のゆきたり
思ひ出は成長をせず膨らまずいつも同じ話する人
吉井勇のうた思ひ出す病院にウォーターベッドの治療うければ
名付けられ魔物となりてハリケーン街を襲ひて湖と変へたる
戦争のなき世にあれど若くして死にゆけるあり病に自死に
自転車の前と後に子を乗せて夕日に向きて走りゆく見ゆ
炎暑日の昏れてかすかにひびきくる暦を知りて鳴く虫の声

朝井恭子　茶房　・森

足元に二匹のチワワはべらせて媼茶房にティーを楽しむ
「実朝」を祀る歌会をたのしみて灯火明るき段葛帰る
風邪癒えて久々に食むサンドイッチ昨夜の残りのサラダ挟みて
ひと桁の昭和に生れ平成を丸ごと生きてなおも煩う
ヴェランダの落蝉風に返しやり全うしたる命と思う
古里の袈妹(いもうと)よりの小包みに母好みいし夏帯ありぬ
亡き母の形見の帯を部屋に乾しひそか詫びたり身に付けざるを

磯田ひさ子　また　・森

師の乗りしことなきマリンライナーに越えたりみどり美(は)しき瀬戸内
岸壁にガントリークレーン立ち並び坂出の町一気に迫る
会場の窓を開けゐて障りなき友の姿にただに込みあぐ
この言葉好(す)かんなと言ひ歯切れよし歌会を束ねる友は真つ直ぐ
名物のさぬきうどんのトッピング先づは手本を示しくれたり
嫁入りの土産の縁の「お入(い)り」とふ虹のやうなる色の軽焼(かるやき)
ふたたびの会ひはあらむかまたと言ひことば短く別れ来たりぬ

市原志郎　病床　・萬

街路樹のさるすべりの花咲き始めいよいよ夏本番となったなここも
我の病を慰めくるるか揚羽蝶庭をくるくる回りているぞ
パワハラとテレビは毎日叫びおり一体世の中どうなっているのか
一日の半分を図鑑を見てすごすそれも今年の楽しみの一つ
子や孫の出かけた雨の日曜日クーラーの音いやに大きく
あちこちの運動会など中止となる今年の夏はまだ去らず居る
音沙汰のなき誰彼を思いつつ今年の暑き夏を見送る

市原やよひ　灯籠流し　・萬

父母送りし燈籠流しなくなるとふるさと天竜川の夏なり
思い出の中の盆行事一つ二つと消え行くことの淋しかりけり
水引草の花のこぼるる葉の繁みおんぶばったのひそみていたり
草の葉と同化しているおんぶばった見つけて嬉し故分からねど
台風の余波か風強く不規則に転って行くみどりの如雨露が
返信を信じ待ちいしスマートホンついに鳴らざり暑過ぎる夏
待てど来ぬ旅立ちし弟よりのメールなり画面はただに白々として

菊岡栄子　そんぽの家に　・漣

わが病みしPSPの難病を忘れいること多くなりたり
PSPの未だ治療法なきことを時折思いいだす哀しさ
来年の今頃はもう居ないかとふとも思えり吾の身の上
近頃は見えにくくなるテレビ画面ベッドにまろび音のみを聴く
睡眠中いく度も止まるわが息よ無呼吸症候群のCパップ着ける
夜ごとに鼻に被せるCパップ真夜無意識に装具を外す
右手に持つ呼び出しコールのブザーをば用事も無きに押しいるわれは

菊池栄子　過去　・湾

わが団地平らかならねば駆けてゆく車があらぬ地響きを立つ
夕まぐれ小公園にせわしなく戯れ翔るは蝙蝠らしも
掌に余り摘めるトマトは皮肉にも猛暑つづきの恵みにありし
包み持ちご飯茶碗か香の物、冷たき陶に遊ばれて居る
何を食べ生き来しわれか味噌汁を添えて三食欠かすともなく
至らざる過去がつぎつぎ零れ出すほころびやすき胸の奥より
海に向く雷神さんにたゆたえる緑樹の影が家に入りても

木村文子

デート　・羊

MRI撮る友と一緒に地下へ行く　年に一度の病院デート
病院の水槽のなかきらきらと小さな昭和三色泳ぐ
小石ごと餌を呑み込んで鯉たちはエラから小石のみ放りだす
検査後はカレーライスとコーヒーで一年分のおしゃべりをする
八月の強い光が階段の影を地面にくっきり落とす
向日葵の蕾いまだに開かずに終戦の日の花壇乾いて
灯をつけず夜の食器を洗いおりボール蹴る音聞こえ続けて

草刈十郎

父の日　・世

紫陽花の変幻に目の離せざるわが家の庭の日々続くなり
かくれんぼする子ら路地に見えかくれ夏至の太陽まだ高きかな
父の日やわれの仕種がなんとなく父の仕種に似しと妻いふ
あまたの蟻力あはせて引きて来し蝶が巣穴をふさぎゐるなり
われらの願ふ非戦非核を墨太く子ら七夕の短冊に書く
父の年母の年越え長寿国となりし日本に生きてゆくなり
雲ひとつ動かぬ夏野あともどり出来ぬ人生ふと思ふなり

國井節子

二足三文　・春

本棚の民族学の本たちと今日でお別れ二足三文
をちこちの村のまつりにカメラ下げ写ししフィルム床が抜けさう
物の無き昭和を生きし証しかも収集癖あり仕舞ひ込む癖
写真家の入江泰吉写真集　古りゆくものは重たかりけり
秋茜　弥生遺跡の上を飛ぶ昔の空を恋ふかたちして
クーラーを使はなければゐられない使ひ過ぎたる害の恐ろし
夏風邪か薬の害か夜更けて湿疹赤く熱くて痒い

小泉泰清

纏はれて　・う

幾度も蝿がきたりて払へども纏はるしつこさ腹立たしけれ
早朝に醒めて纏はる蝿の歌詠みて一先づ平けくなる
人間は巨大に写り弱小の蝿の眼に恐怖宿らむ
根負けをしたるに蝿は何時の間に消え去り何処か隠れ見詰めん
箸の先に宮本武蔵摘まみては払ふ仕草の映画に驚く
蝿叩き殺めんとすも素早くて嘲笑ふごとかすか音立つ
人間を除く動物纏はれる蝿を殺めず只管払ふ

河野繁子

熟れ実　・雁

雪景色ましろの睦月に生れたる孫なり二人子連れて訪う
「お母さんのおばあちゃん」と寄りて来るお喋り上手の二歳八か月
起伏あり長き道のり時に来てわが膝に乗るこの温きもの
二歳児の記憶なくなるこの場面老いの記憶も心もとなし
喜々としてブルーベリーを摘むおさな小さな指さき熟れ実に届く
広辞苑七版にまだ載らぬ「喜々」見かける多し迷いて用う
パソコンに含む言語は公道をゆきてやがては辞書に載るらし

小西美智子

蟬　・大

すずかけの樹下過ぐるとき唐突にみんみん蟬の鳴きはじめたり
みんみんとはげしく鳴きて静まるや遠くに鳴きいる声聞こえくる
蟬の声あまりに激しき夏のありきわが耳のまだ若かりしとき
炎暑のなか目に沁みてくるしろき花さるすべりまた夾竹桃の
朝取りのほうれん草の届きたり〝緑の輝き〟と名づけられいて
〝包恋草〟と名づけられたる青き菜に若き夫婦の作り手うかぶ
高知より届きしぽんかんシャーベット酷暑の昼のいのち養う

小林能子　盆棚に　・羊

迎へ火のおぼつかなくて盆棚に枝ほほづきの朱点(ともす)
盆棚に寒川の梨　松田の酒　友の便りに『歌集』も添へて
五十年ぶりなる電話たんたんと夫と計算尺(HENMI)のいのちに触れくる
五十回忌も昨日のつづき明日へと「遠忌」などとは言うて下さるな
ナッシュビルにテネシーワルツ聴きしよりふと口遊む昔のやうに
ひさびさの台所(キッチン)に立つ嬉しさよ銀色の煮干ひと握り煎る
畏れながら「おかか茗荷」も盆棚にたてまつるなり　今日の幸せ

近藤栄昭　初霜　・福

霜の白晴れぬ尾瀬沼にび色に沼の岸道見晴らしめざす
初霜に滑る木道の横歩き止まりては見る明け行く空を
尾瀬沼の木立の一本動きだし続き列なす木道の上
明け来たる空に誘われクシャミする尾瀬の谺は爆裂の音
尾瀬沼に異国の人の声の浸む楽しみいるや山の静けさ
木道の下りの濡れに肘を打つ出血なきをなでつつ進む
木道の霜を溶かさぬ草の影白き木肌は氷温の色

近藤芳仙　舟下り　・信

はじまりも終りも同じ山形の最上川面の舟にたゆたふ
吾妻連峰(れんぽう)の懐深く生れにけむ滝のし吹きて川面に入れり
県鳥のオシドリ法被に舟頭は川面を見ては櫓をまはし漕ぐ
雪どけの最上川面はエメラルド舟のオレンジスイスイ流す
米・大豆・紅花・煙草をつみくだる江戸の世の舟さぞ待たれゐむ
豊かなる川面を下りゆく舟に「ヨイトコラセー」ほどけゆくなり
やはらかき表情をして乗りてゐむ舟に案内の訛ききつつ

坂上直美　天地始粛　・天

秋よ来よ祈りにも似る燃ゆる日々カーテン閉ざしただ籠もるのみ
ようやくに涼しき風の吹き初めてヴェランダに出でて山を見る朝
秋風よ歌なき日々を吹きはらえ野に零れいる言の葉の花
おいしおす歯にしみとおる大吟醸苦しき夏を越えしこの夕
納戸にも秋風入れん捨てられぬ外国旅行の絵ハガキなんど
秋便り誰にか書かん竜胆の便箋・封筒われを待ちおり
お姉さま秋が来ましたおいでませ京都の北の鳴滝あたり

坂出裕子　まつり　・洛

祇園会(ぎをん)のすめば暑さはやはらぐと勝手にきめて待ちてをりしに
祇園会の囃子の音こそ夏送る涼しき楽(がく)と聞きて来たるに
例年のならひにも似ず夏祭すぎていやます夏の暑さの
五十年続けられたる花傘の巡行中止　暑すぎるゆゑ
人間が無茶をするから神様がおこつてゐるかこの猛酷暑
生きてゐるだけで大変体温を超ゆる暑さがもう二週間
いつかまた冬が来ることあるのかな信じられないことのやうにも

佐久間晟　日乗（一六）　・湾

これを食えそれも食えとの関わりはわれをし思う妻の誠意か
日々をただ浮遊しているわれなれど百五十人の門人は未だ棄てられず
慕い寄る門人のため午前三時起床は続き既に六十年
千万円を超す蔵書の数々を見上げては今更無駄とも言えず
何がための歌作りなりや佐久間晟は今も変わらず此処に生きてる
よくもまあ続けしものよ銭にもならぬ歌詠み六十年を
もしわれに取り得があれば歌詠みしゆえに皇居にも招かれしことか

佐久間すゑ子　暑い日　・湾

暑い日がつづく。あの日も暑い日だった、昭和二十年八月十五日
今も思うこと。この暑さの中に浸された命のいとしさよ
あじさいの花の中に居て、ふと誰と一緒だったろうと思い返す
今まで何万歩、いや何億歩歩いたのだろう。しみじみと来し方を思っている
明け方の樹の息づきに清められている。もうこのままでいいのです
国策なのか誤りに向かって居るよう。ニュースを見れば見るほど
薩・長の精神を口にする政治家。東北はまた賊軍になるのか

佐藤道子　栄枯盛衰　・甲

グリーンホテル在りしあたりは山と生る草分けゆけど浅間は見えず
百合咲きゐし池の在所はわかぬまま蓬の露に濡れつつ戻る
丈高き総花ほしいまま群るる楽しき店の在りしあたりに
出来たてのクレープ子等と楽しみし明るき庭も遠き思ひ出
その昔自由に出入りせしホテル代替りして高き塀立つ
一泊二万二泊以上と聞くホテルセレブと言ふはいかなる人等
発地市場の庭の散策日向ぼこ天のリハビリ日課となりぬ

椎名恒治　空白　・橋

あはやといふ一瞬の間なり楽しくはなし老いは夢さへ
現れてその影はたちまちに断崖に消ゆ夢なりければ
八十路まで生くればよからむと彼の人の言つひに外れぬ
戦争を終りて七十三年経たり戦争なきを平和といふか
少年の頃口遊みし樗牛の言「人生是奈何一大疑問にあらずや」
「生前愉しむ一杯の酒云々」酒を愉しみし文人なりき
ことごとに集ひし友のみな失せてかの酒窟詩窟彼如何なりしや

鈴木結志　妻の新盆　・福

燈籠を高くかかげて灯をともし新盆妻の御霊を迎う
ともがらの御詠歌の声唱和して心にしみる妻の新盆
菩提寺に新亡精霊供養する十まり僧の読経和合す
「菊の華」香を手向けて身を正し思いは深む在りし日の妻
新盆の供養のひとの数珠つなぎあらため思う妻の功徳を
仏法の教え尊み新盆の妻の在りし日の面影しのぶ
庭飾る化石の肌のミクロ花密に緋の色黄泉のうつしえ

世木田照比古　爪痕　・茜

抉られし山の斜面に留まれる巨岩一つに避難続きぬ
町をめぐる道路は崩れ列車は不通孤島に閉ざされし思いするなり
店員の出勤不能休業と張り紙ありてコンビニ開かず
大岩に思いつながる台風禍遠き戦後を返して戦く
山梨のレスキュー隊着き長崎の給水車両に心頼もし
床下の土砂掘り起こすボランティアに働く友へ拍手を送る
家呑みし長き崩落緑濃き夏山に太き爪痕となる

関根榮子　プリント　・埼

出できたる歌会のプリント古りおりていくたりの友この世にはなし
活き活きと吟行会の歌ならぶそれぞれ若き日を残しいて
昼寝する耳は聞きとむ大型の台風接近を知らせるニュース
庭すみに夏を急くらし咲けばすぐ丸き実結ぶ花伊勢花火
この地にも富士講の名残りの築山を上れば古りし小さき鳥居の
官軍のとどろく足音も幻に会津西街道を歩みていたり
道の辺に東下りの夢あわくとどめて静もる業平塚は

関根和美　草津温泉へ　・埼

冬までの時まつごとく青々と低く出揃うネギ畑を過ぐ
変哲のなき味なれど高崎のだるま弁当容器のたのし
お蚕さま育みまいりし農家なり総二階にまた楢のせいて
お母さんにふさわしと子の招待は慶長の創業文人の宿
人ごみを逃れ丘へと移されし雲を望むの宿の名うべなう
天正のむかし癩の身いやさんと草津栗生に天主堂ありき
湯畑と西の川原湯往還し母に見つけし干し山くらげ

高尾恭子　土佐点景　・大

天界に今し発つ人ありぬべし火の玉ほどの星ながれたり
古稀ちかき少年三人あんぐりと口あけている　夏の大三角
大接近といえど未知なる東をひときわ赤く星かがやけり
海鳥のひくく飛ぶ空はてしなく昨夜の美ら島に大人逝きぬ
天と地の狭間をひかる白百合の一輪として人の生き死に
うつむいた少女のように百合しろく渡岸道路を連写している
歩測せし人の足どり風に訪う海岸沿いのアイスクリン売り

高津砂千子　さみどり　・風

さ庭辺に蚊遣りたきつつ草を引く朝一時間風さやかなり
遅播きの朝顔ようやく咲きはじむ八月下旬ピンク三つ四つ
ぎんなんを埋めしはいつかさみどりのいちょう目に入る二寸が程の
朱色ののうぜんかずら真っ盛り百段階段のぼりつめれば
うちわ手にふうわりふわり風おこす真夜に目覚めてひとりの遊び
ジャンケンに負ければあおぐ五十回あの大うちわまっ赤だったね
身のめぐり忙しく過ぎてふと見ればサンスベリアの伸び著し

高橋和代　振り分けに　・桃

丘にして沈む夕陽と振り分けに出で来し月の思はぬ薄さ
来合はせて見る赤き月　爪立つも精一杯の曾孫のかたへ
赤き月見せやらむ腕すり抜けて幼は爪立つ危なげなるも
丘に見し沈む夕陽と月の出を汝は生涯忘れずにゐむ
夕茜追ひゆくさまよ回送の列車ゆるゆる車庫へと入りし
深みゆくのみの病ひのこの懈さ「早く迎へて」灯明を点しつつ
自が意志とて如何むともなせぬこの命ただただ耐ふるより無し

滝田靖子　友　・新

ご遺体を気持ち悪いと言ふ人をわたしたちはもう友と呼ばない
ひと晩に幾度も電話をかけてくる独り居の伯母すこし疎まし
ああ今日は弟の誕生日ぢやないか年に二度しか会はないけれど
孫生まれてぢぢいとなりし弟は困ったなど言ふ少し嬉しげに
ひとごとにあらざり十二日間連続の労働の果てのくも膜下出血
はるばるといふをしみじみ思ひをり七時間余をバスに揺られて
三日分の新聞まとめて読んでゐる旅の荷物をそのままにして

竹下妙子　炎熱　・霧

並び生ふ杉の木立の傍らに小さき地蔵はほほゑみ御座す
木の芽濡るる道のかたへの地蔵さま耳に雫のかざりをつけて
己が罪削ぎ落すごと鍋磨く髪ふり乱す女人愛しも
罪多く生き来し吾かたとふれば没つ日のごと地震のごとしも
子ら去りて広くなりたる部屋ぬちに遺影の夫とほの白き闇
胸しぼり蝉は鳴きたり緑蔭に巻き縛られし炎熱の中
蝉しぐれ見えざるものに和して降る滝となりつつ吾が背を打つ

田土成彦　すすき原　・宙

一万歩七キロばかりをさまよひぬ街の灯りを靴底に貯め
金色のまたしろがねの波となり芒の原を野分すぎゆく
すすき原分くるひとすぢ風の道小雉の皇子のかく過ぎゆきし
荒れ地野の髑髏の空ろ吹く風が老いし小町のかなしみうたふ
羊羹が楊枝をぬけて床に落ち凹んだ角が不憫でならぬ
ネアンデルタールの遺伝子も継ぐジャパニーズ二十一世紀を駆け抜けて行け
シベリアから樺太を経し遠祖の一人ぞしかもマンモスを追ひ

田土才惠　切符　・宙

ゆるゆると自動扉の閉まりゆく空気を区切る熱暑の昼を
生き残る花もあるなれ猛暑日を鉢のミニばら真っ赤に開く
後ろより喃語聞こゆる夏のバスほのほの過ぎるバス停三つ
熱中症縁なく暮れてゆきし夏生きの緒繋ぐ二つの命
春くれば客車が通る貨物線聞き慣れし音に貨車すぎてゆく
夏の海見ることもなく秋立てば青春十八切符が欲しい
しばらくを会わぬ末孫送られし写メールに少女のかんばせ見せて

玉井綾子　猛暑　・羊

炎天下、アスファルトの道　地中から林立してる四分休符の熱
わずかなる液体のりを逆さにし落つるを待てる夏至の暮れ方
立秋を過ぎての猛暑着てるのも見るも疲れる真っ白なシャツ
ジェット音、カラスの鳴き声、蝉の声　猛暑に決壊するハーモニー
台風の風がリュックのポケットに詰め込まれし半券ぶちまける
猛暑日の身体を中から冷ますのは冷菓ではなく千葉産の梨
五時半を知らす「夕焼け小焼け」後に一泊おいてひぐらしの鳴く

虎谷信子　盆のころ　・伴

お精霊さんへの盆のお給仕手ぬき詫ぶ。棚経の僧にはげまされゐる
ひぐらしの鳴くしばらくを　こほしみて、盆提灯の彩顕つ　端居
寺庭に居並ぶ　地蔵尊まつる。奉納前だれ　新しきに更へ
地蔵まつりの　お下がり囲み和みたる。ことなど昔語りとなりぬ
外遊びの子等の姿も　なくなりぬ。化粧地蔵の　笑顔に会ひぬ
せみがらを数多はきよせ　庭石の、かげにそっと　埋めてやりぬ
台風荒れる思はぬ強さ　大屋根の、鬼瓦まで　落され災難

中島央子　八月　・森

マンションの高層階にひとり住む姪あり月恋ふかぐや姫かも
あたたかくクローン犬なぞ抱きつつ月ながめゐむ百年のちは
書きなづむ原稿用紙かたよせてテレビの高校野球に暮るる
紙づまり度たびおこすコピー機の見たくもなき腹くらきを覗く
冷蔵庫のあかりたよりに水を呑む汗ばむ午前三時の「オー・エス・ワン」
賜はりし大吟醸の桐の箱美しき柾目に捨てられもせず
夢にたつおほよその人既に亡く気温下がらぬ夜半に目覚める

中島義雄　夏の月　・岡

爆撃をくぐりて生きし友もみな世に亡くて今日終戦記念日
編隊の爆音過ぎし壕出でて針金の如き月を仰ぎき
当直を解かれて短く眠らむに明日無きごとく鈴虫が鳴く
グラマンの機影消えたる機銃座に友が言ひいづる故郷の盆
爆撃に爛れし基地の夏草に立ちて聞きたる終戦の勅
敵将の降り立たむ日を近みつつ月下に爆弾の信管外す
復員の無蓋車のなかに仰ぐ空茫漠として夏の月あり

永塚節子　カフェ　・銀

ジャカランダの藍の色清し友ありてそぞろに歩く熱海の街に
ジャカランダの花を訪ねにアフリカへ旅せし友の逝きて幾年
アフリカはあまりに遠しせめて一度宮崎に見むジャカランダの森
駅までの直登の階段ゆっくりと足を運ぶも息ととのわず
昔より変わらぬ坂道宮さんは手を引かれつつ登り行きしや
古民家に似たるカフェの片隅に今日を惜しみてなお語り継ぐ
大振りの器にゆらぐ作り立ての葛切りの味今日の記憶に

萩葉子　茗荷の花　・銀

あの夏のひとりの夕餉薄緑色のマスカットひと房にすませる事も
バス電車バスと乗り継ぎ見舞う日々真夏日だったか空の青の記憶
必携の国語辞典をめくりつつ「はじめまして」の何と多いこと
蚊帳の中に螢はなして眠りしは夢だったのか夢をみている
植え込みの中にもぐりて茗荷の花ふたつとりたり雨の晴れ間に
亡き友との思い出の海が白波を立ちあがらせて台風二十一号
虫の声遠く近くしみじみと今年の秋に浸りておりぬ

白子れい　夕風　・洛

白き腹みせてころがる蟬いくつ散歩の歩み暫々止まる
上流にて水藻とりいん疏水の水けさ蒼白くにごりていたり
己にはきびしくこの身修めんと思うも暑さについゆるびくる
夕風にさそわれ出でて庭の草抜けども抜けども限りのあらず
山の端に沈む夕陽を見送りて買物袋片手に出かく
半月を仰ぎて帰るわが頬をなでくる風のやさしく涼し
人生の峠のいくつ越え来しも尚眼の前に山の現わる

ばばりょうこ　百寿讃歌　・鹿

千衣子とうお名まぶしみぬ平成の三十年葉月二十の百寿
千の衣かしらにもたれしきみなればいよよ健やかに重ね着されよ
なからいは姉妹のごとしもしやきみ前の世ではまさしく姉さま
まさしくもまさしく姉さま今の世に温とさを曳きつなぎたまいぬ
姉上と慕い来し四十年ゆび折りてこのとしつきはおろそかならず
かんばせをお花にたとえてみましたらうすく紅う芍薬でした
千の衣うす紅いをまとわれてほほ笑みいます百寿讃歌の

浜谷久子　墓参　・地

言い出せぬ言葉のように降らぬ雨どんより重い雲の広がり
枯れ色の里芋の葉に降り注ぐ雨のさざめき旱天癒やす
ほおずきの赤と緑のコントラスト盆の供養に華やぎ添える
墓守の本家の姉さん挙げるひとつ酷暑の畑は病気が少ない
手に重い真っ赤なトマトたわわなる長々茄子の墓参の土産
夏祭りにぎわう公園児の三人さがす視線を揺るがす音響
恵とも命呑み込む魔ともなる自然の元になお地を耕す

浜本芙美　花火　・夢

このま昼何処の花火かと語りしが花火製造所の大惨事なり
百日紅ブロック塀越えほの明る道ゆく人に語りかくごと
昼の仕度に少し早ければドラマの「銭形平次」に心放てり
裏庭の植木鉢に移してやりし彼の蝉ならん今鳴きたつるは
週二回浜脇さんちの犬の「ぶんた」に会うのが夫の楽しみとなる
洗面所の排水孔におこす渦遠き鳴戸の渦につながる
六匹の小犬の絵柄の眼鏡ケース目線の届く位置におきたり

檜垣美保子　雨　・昴

地下道の出口に鳩が雨やどり二段下がりてわが雨やどり
はれわたる西方の空のあかるさ　けさの雨はすでにわすれて
ふるさとは母居るところ「広島に帰る」と言う子「行く」と言う孫
二歳児の孫に「バイバイ」しくしくと泣かれてしまう夏の空港
たんたんと日の過ぎてゆく夏の朝椿にかたく尖る莟が
来歴は知らぬままなり四季咲きのアザレア椿夏のくれない
ほんとうのこと言われたり笑いつつオリヅルランの葉の先を見き

福田庸子　かもしかの道　・今

尾根筋の明るき楢の木のもとに長き脚もつ生きものの影
細尾根をたどり麓にくだる道かもしか一つみじろぎもせず
かもしかの通ふ道なり眼下の木木と紛ふも顔たしかなり
かもしかと見つめあふ山水楢の丸き実まろびしづまりゆけり
両側に登りくる霧尾根道をあはくにじます水楢の木木
つひえたる大屋根の色けざやぐを見おろす麓は草がおほひぬ
荒地瓜の勢ひ強し人間の生きたる跡を這ひのぼりゆく

藤川和子　超高齢　・眉

残月の光を浴びて二千歩の往復あるきも限界となる
影法師親しき友とし朝まだき重たき脚を励ましながら
ゆきずりにフェンスに登る蔓草をついと摘みたり無意識のうち
古ピアノ処分せし後の淋しさよ内耳にかそか余韻のこれる
役所より長寿祝ひを頂くに面映ゆしとも空々しとも
高齢化に肩身は狭しさはされど戦禍くぐりて生き来し自負あり
カサカサと晩夏の木の葉が吹かれをり季節の移ろひ老いを急き立つ

藤田美智子　徒長枝　・新

窓枠が木だつた頃の雨の日は今よりずつと雨を見てゐた
小高区の小さな書店〈フルハウス〉柳美里はエプロンを着けて働く
猛暑日の南部風鈴ぢつとして鳴らせぬ音を溜めこんでゐる
色の名をもちたる鼠との差異は何　モグラは色の名前をもたず
徒らに長しと書ける徒長枝に新梢（しんせう）といふ名のあるを知る
伊達小三年の児童数なり八月の空爆に死にしイエメンの子ら
〈バランスのよき〉報道に目隠しをされつつ我らいづこへ向かふ

藤森巳行　あずさ号　・銀

八時発あずさ五号でふる里へ二時間半で松本に着く
外国の人が隣りに座りたりフンワリブラウス我が肘かすめて
あずさ号とスーパーあずさの違ひをば考へてゐる松本駅に
賑はひし山際の墓地盆過ぎてカナカナカナとひぐらしが鳴く
盆過ぎて夕闇迫る信州は頬に冷たい秋の風吹く
ふる里の森の赤松立ち枯れて見るも無惨な姿を晒す
今もまだジュンは暮らしてゐるだろかキューポラのある川口の町で

船田清子　酷暑と晩夏　・天

コンクリートに固められたるわが庭に生（あ）れむ蝉の子活路は得しや
盆過ぎをピタリと蝉は声たてず酷暑続くも季（とき）を知るらし
酷暑と乾き大雨（たいう）にまでも叩かれて農家は涙　主婦は渋面
車窓より見上げてあれば黄ばみつついちやう並木も熱中症らし
百年の高校野球史を祝ふ年大阪桐蔭歓声に沸く
球児らの朝夕仰ぎし生駒嶺（ね）に奇しくもかかるあざやけき虹
夕風に人恋はしむる香のたたずおしろい花は幻に咲く

牧雄彦　シーサー　・大

ぐらぐらと揺るる天地(あめつち)をなすべきを為し得ぬままに地震(なゐ)をさまりぬ
大地震に書籍アルバム散乱し頭のなかも乱れぬしばし
大地震に庭のシーサー砕け散りあはれ顔のみ天あふぎゐる
大地震に崩れし崖の上二軒暑さ極まるけふ取り壊されぬ
音たてて重機が家をこぼちたり跡の土台を夏の日が灼く
住みし人も家の記憶ももろともに五日ののちは跡形もなし
篠原さんの家は早や無く丹念に手入れしてゐし花壇も失せぬ

松浦禎子　和田塚　・羊

笛を吹く江ノ電車掌のえくぼ見ゆ梅花咲き初む駅のホームに
挑発に乗りて亡びし一族の名をひそかにも残す和田塚
一族の中に交じりし幼子の霊はいずこへろう梅かおる
由比ヶ浜まで五百米とうその浜に並べし首(しるし)二百余をおもう
和田塚より由比ヶ浜までを思いゆく水上スキーの波しぶく今日
わがいのちなお愛しまん鎌倉の古戦場跡みな足の下
いくさ跡踏みしめてゆくわが歩み「鎌倉まめや」本舗長谷まで

松永智子　風　・嵐

八月の朝のベランダ油蟬のなきがらひとつ風のなかなる
いづくより飛び来しならむあかとき　吹かれてゐたり腹白き蟬
油蟬腹しろくして一夏かたちそのまま終りてゐたり
この夏のいのちの終りあたらしく蟬の腹のふかれて白し
ベランダに吹かるるままなる油蟬かたちよきなりてのひらに乗す
そのしろき腹空に向けベランダにふかれて蟬のつひなるかたち
一夏のいのちのかたちみだれなくこのあぶら蟬音よく終る

三浦好博　天女　・銚

繰り返し寄せゐる波に沈みたる心が負ける汀へ行かじ
樹液吸ふ蝉を見てをり蚊のごとく血を吸ふならば恐ろしからむ
沖縄が声をあげられなくなりぬれば我らのデモクラシーも終はりぬ
黙祷に般若心経唱へをり八月六日八時十五分
「十五年ぶりに地球の大接近」火星人らも大騒ぎだらう
我が首にとりつき来る蟷螂の喰へない奴だと飛び立ちゆけり
取り返ししころもを赤く染めにつつ天女は胸を張りてたゆたふ

宮本靖彦　干天慈雨　・凌

このひと月雨はひと日の日照雨(そばへ)のみ庭のさるすべり蕾ひらかず
雨降らぬままに炎暑は終らむか今朝は涼風すき間より入る
初鳴きの虫の音をきく朝となり今日甲子園優勝戦迎ふ
ひと月ぶり雨音うれしさりながら地揺する風と連れ添ふうとまし
台風の進路のちかく雨戸打ち軒を揺らして風猛りゆく
夕立は葉末を鳴らし屋根ならし初秋歓喜のうた声と聞く
屋根を打つ雨に目覚めし九月朔暦どほりの秋来りませ

三好聖三　雑　・伊

加枝さんの〈のんびりずむ〉に肖ればなどとさやげる打算のランチ
行く先の国の気配を引き寄せて遊べば遠く消えゆく船は
ひたすらに内を見つめて静かなり菊池伶司の眼窩の男
掠めとる、知の盗人を地でゆけばすっかり秋の夜とはなれり
生き急ぐことなぞ無いと粛々と香川進が語る十月
草むらに打ち捨てられて死ににける子猫の口に血痕のある
縄張りを護る猷の争いに分け入りまたも違反(いへん)成したり

御代田澄江　・茨

湧くやうに小さき夏蝶訪ひ来たり遊びゆくなり風無き真昼
気息奄奄たる植物たちに水やれば己自身が生き返るごと
淡きピンクのやさしき色に百日紅今年も咲きて庭の華やぐ
夏蝶もシオカラトンボも訪れぬミンミン蝉は壁にも止まり
素手に捕り階段下りて見せに来るミンミン息子よ早く放して
空雷様ゴロゴロ音のみ鳴り渡り雨降らすなく往きてしまひぬ
ラジオ言ふロコモティブシンドローム我未だくもまぢかならむと思ふ近頃

茂木斌　・埼

根府川は寂しき駅ぞ改札は無人に駅のスタンプも無く
熱中症など知らぬげに炎天の庭に赤々さるすべり咲く
赤木市平なに者なるや辞書引けばさるとりいばらの異名とも出る
幾たびも通ひ知りたる高尾駅乗り場に迷ふ人をナビする
高尾山一号路ゆく若者の一本足駄は天狗か凜凜し
朝涼の山気のなかにみんみんの声湧きたちてここ高尾山
バウムクーヘンのバウムは木とかさう言へばリンデンバウムの木があつたつけ

もとむらしげと　・そ

ただいまという声きこゆ待つ人のあるを疑わぬ明るき声で
触れ得ざるものの如くに置かれたる父の形見の腕時計一つ
八月の明けゆく庭の高みにて木槿の白き一輪灯る
結婚は文化の融合と子に言いて今に思えりわが家のことを
ショップより出でて徐に差す日傘腕まくりせし男が行けり
縁側に寝ている猫を見にゆけば真実いとしいその無防備さ
仰向けに眠れる猫の手も足も小さく万歳している如し

八乙女由朗　・柴

東北の秋田県より出できたる雑草軍団甲子園に根付く
土色の魂見せて勝ちすすむ金足農に日本が沸けり
九回の裏こそ来たれ跳ね返すど根性ありて由由しさ誘う
しばしばも祖の魂滲み出てうるわしく見ん腕の動き
ひたすらに胸二度反りて校歌うたう少年たちの雄叫びの声
農業を支えん思い深ければ「士農工商」いまだも成らず
ぬかる田に牛の鼻取り手伝いしかの日の思い湧きいずるかも

山下雅子　・習

やんちゃな児も高校生も集う夏このひまご達を合わせたき人
ひさびさに会えばにっこり話し出す三歳の君の通訳はママ
目の合えば大の字の手足弾み出す六か月の児の瞳かがやく
「かに二匹ダブルゲットヤッター」と児の歓声に頷く間のあり
四種目を達者に泳ぐ頼もしさ四世代リレーの夢疼き出す
輪になりて線香花火を一斉にはなやぎのあと別れが迫る
バイバイの声を残して山くだるテールランプは闇に消えたり

横田敏子　・福

夏の蝶青空高く昇りゆき見失いたり　誰がたましいや
泡立てるビールのコップかち合わせうからと乾杯お盆の夕餉
どう見ても鮠隠せずサングラス掛けて外してまた掛け直す
暑い暑いと疎みておりし太陽の隠れて寒い暗いとわれは
台風も豪雨も避けて通りたり原発事故に傷負う福島
手触れれば零れて小さきあさがおの種ひと粒のいのちを思う
身の巡りぽつりぽつりと綴る歌ミソハギさわさわ揺れいるばかり

吉内尚彦　首切り　・浜

虫売りの行燈の字に嘘はなしカンタン一匹一両という
はるけき日眺めし記憶の舞鶴港いま孫と見る波静かなり
伊吹山を二つに割って飛行雲君は異国の人となりゆく
この町に短歌の友なく老人会グラウンドゴルフの話弾める
波荒き会社の人事を四十年首切りし人幾十人ぞ
かまきりの斧ふりあげてこの夏に虫の命を奪い来たりし
秋の虫飼えば虫屋と人言えど鈴虫一匹売りしことなし

吉永惟昭　宗匠逝く　・熊

肥後古流利休のこころ留め継ぎし小堀素十氏逝き給う　嗚呼
お点前は誰に似しかと目探りて笑み交わせしの宗匠なりにき
おっとりと柄杓措く手もやんわりの宗家の孫は祖父にそっくり
しゃかしゃかと袱紗捌きも気負いある祖母に似たるかわが末娘
テレビ局会長永く報道の先駆なれども静かな大人
県文化協会長に推されてもさらりとこなす粋な通人
初七日の献茶さげきていただきぬ　うすら冷たくのみど過ぎゆく

久我田鶴子　ノート　・羊

地層なす紙のなかより若き日の短歌まなびのノートいでくる
水原や川野・小島の発言に関根和美の切り返し鋭き
晶子からあきへの流れ追ひながら知性と感性に話はおよび
哲久を生きる発条としできたりと山田あきなる存在を言ふ
哲久にありあきにはなきと水原の言ふおもしろさ歌のかなめか
古さにも言及しつつ夫婦なるたづさへかたを和美は言ひき
運動にならず止みたる会ありき〈水の会〉とは誰が言ひだせる

香川進の生きものの歌　1　田土　成彦

・栗鼠なども呑みくだしたるおろちにてこの横たわりの
しずかなるかな
『木曽川』より

おろちはふつう蛇の大型のものをさすが、どことなくある種の威厳や霊力を備えているぶん雰囲気のある言葉だ。今では都市部での彼らの棲息領域はなくなってしまったかと思われる。しかし、この歌の生まれた昭和三十年代末頃はまだまだ身近な存在だった。押し入れのふすまを開けると布団の上にとぐろを巻いていたとか、鳥かごの鳥の姿が見えなくなってかわりに腹のふくれた蛇が籠の中にうずくまっていたとかという話をよく聞いたものだ。

この歌、悠々と人目に付くところで横たわっているおろちに対して作者は敵意を持っていないし、蛇も危機感を感じていないようだ。たぶん農村部では鼠を捕ってくれる蛇は悩ましいところだが良い存在だったのだろう。まして神話や民話の中では崇められ恐れられた存在であればなおさらのことだ。下句のユーモアは作者の胆力の表れかもしれない。それにしても「横たわり」とは実に大胆な直裁な表現だ。単純化された構図の中にこの時代の農村の空気感が巧まずにうたいだされていると思った。たぶんまだ舗装もされていない村道の散策のワンショットなのだろう。メモ帳には「おろちの横たわる」と書かれたのかも知れない。

今月の二人

ふるさと

佐藤　昌

明けの空きらめく星座は冴え冴えと冷え込む朝に北ぐにをし思う
お天気の画面はたちまち白くなりまだまだ吹雪くふるさとの空
淡雪はヘッドライトに光降り溶けゆくほどに春はそこまで
峠路の夜霧の中のドライブに満月照らす里の静けさ
田に遠く残雪の鳥海を望みては歩みを止める日曜の朝
ふるさとの母の病を看て過ごし来る日は毎日思い出を連れ
病室の母の点滴を見つめつついつまで経っても親はありがたき
歩みゆく木陰に涼しき朝の風ひばりは囀る青田の空に
「彼岸」とは春秋の「日願」というらしき豊作祈り父母偲ぶ
高速バスは北へ北へと街を抜け過ぎゆく紅葉の速さ楽しみ
ふるさとの踊りを描く「田んぼアート」実りの秋にまた訪ねたき
ピンク色を咲き揃えたる百日紅並木の向こうに秋めく風が
墓参り一年巡りて母思うふるさとの風に手を合わせつつ

私の生まれたところ

私の生まれ故郷は秋田県五城目町です。仙台に住んで二十年余りになり今は仙台人を自負しています。東北地方を転勤してみて思ったことは日本海側と太平洋側の天気はほぼ真逆であることで、とくに冬の日照は、鉛色の空とピーカンのお日様と大きな違いがあります。このことは、自分の半生において得をしてしまったのではないかと今更ながら冬の晴天に度々思うことです。故郷に詫びることではなく、自分の父母に感謝すべきであると思っています。

私が短歌を始めるきっかけは、元の職場の先輩二人が佐久間晟先生ご指導の同じ短歌会であったことが縁でした。また、自分の記憶に、中学高校時代の国語の女性教諭が授業で和歌、短歌を情熱的に朗詠する姿が今も鮮明に残っており、なぜか短歌に惹かれるものがあったからとも思います。

いまは、父母ともに亡くなり、故郷は年に数度しか訪れない土地になりましたが、盆帰りには百日紅並木が迎えてくれる故郷に心を寄せ、自分の周りの出来事を美しい日本語で表現できるよう研鑽に努めて参りたいと思っております。

今月の二人

降りそうで降らない

橋場　節

早朝の通勤電車　「お疲れぇ」と手を振りながら降りる女子キラキラ
四賀の福寿草が取り上げられている！東京で読む天声人語
ぐずついて降りそうで降らない曇空咲きかけあじさい雨を欲しがる
胸や腰を強調された女の子　好きなマンガの嫌いな部分
生活者　答えはとってもシンプルでお金が必要だから働く
「ま、いっか」いい加減さに呆れても心ゆるめる魔法の言葉
クロゼット隅にころがる銀指輪過去の思いもくすんで古びる
ボッチとか既読スルーとか言われても　孤独の受容は生のテーマ
「お前がどけ」熱帯夜とどろく駅ホーム怒鳴る男の面　鬼見える
波波とコップにビール注がれる　すぐに父から瓶を奪おう
三十九で死んだ恩師の無念とは　分かるか四十五歳のわたし
室外機ギュルギュルうなる夜半時　こおろぎ高音コラボレーション
シンデレラ今日もお帰りなさいませ　ベッドへ飛び込む23時59分に

伝わっていますか

神田佑子さんに誘われて、短歌を始めて三年。川崎市在住ですが、故郷の長野県、信濃支社・桑の実会に籍を置きます。年に一、二度、近藤芳仙先生や仲間の皆さんとお会いするのが、無上の楽しみです。

会社員ですが、小説の執筆や楽曲の作詞も楽しんでいます。散文と違い、短歌には、日常の場面や心象、そして風景を三十一字で切り取るという、独特の難しさがある。ただ、表現が、五や七に上手くからみついた瞬間は、嬉しくてたまらない。最近は、「もっと素直に作りたい」という欲が出てきました。

何を伝えたいか。そして、それが伝わっているか。一番、気にかけています。報告詠にならないよう、読み手に物語を想像させられればいいなと。

書きたいテーマは、大切な人との出来事や想い出、郷愁、他者との関わり、時間の経過や四季の移ろい、社会現象、日常からの逃避などなど。愛ある皮肉やユーモアを交じえ、表現を追求したい。評価や指摘を気にし過ぎずに、私の短歌を楽しく作りたい。

伝わっていますか。

◆今月の二人・佐藤　昌作品評◆

田に遠く鳥海を望む

仙台に住んで二十年になるという佐藤さんの故郷は、秋田県の五城目町。秋田市から北に三十キロほどの所だ。

・お天気の画面はたちまち白くなりまだまだ吹雪くふるさとの空

テレビ画面に故郷の天気を見ている。同じ東北と言っても、太平洋側と日本海側の差は大きい。きっとこの日も、故郷の吹雪く空とは違って、仙台の空は晴れていたのかもしれない。

・田に遠く残雪の鳥海を望みては歩みを止める日曜の朝

田んぼのはるか向こうに、残雪の鳥海山を望む。田んぼには水が入って田植えの頃だろうか。気持ちよく視野が広がり、故郷の美しさをあらためて実感させられたことだろう。「日曜の朝」が、久しぶりに帰った故郷であることを思わせる。

・「彼岸」とは春秋の「日願」というらしき豊作祈り父母偲ぶ

春のお彼岸、秋のお彼岸。その「彼岸」とは「日願」でもあると知った作者。父母を偲ぶだけでなく、豊作も祈ったという。

・ふるさとの踊りを描く「田んぼアート」実りの秋にまた訪ねたき

田んぼに品種の異なる稲を植えて絵にする「田んぼアート」。佐藤さんの故郷でも行われているらしい。実りの秋を楽しみに、思いはここでも故郷につながる。

・ピンク色を咲き揃えたる百日紅並木の向こうに秋めく風が

百日紅の並木。「ピンク色を咲き揃えたる」から、作者の優しい気分が伝わってくる。その向こうに秋めく風を感じつつ、歌は言い終わらないまま余韻を楽しむかのようだ。

◆今月の二人・橋場　節作品評◆

咲きかけの紫陽花

評者・久我田鶴子

橋場さんは川崎市在住。東京、日本橋のオフィスで働く。ふるさとは、長野県の四賀だという。

・四賀の福寿草が取り上げられている！東京で読む天声人語

四賀は二〇〇五年の市町村合併により松本市になっているが、橋場さんが生まれ育った頃にはまだ四賀村だった。その「四賀の福寿草」のことが「東京で読む天声人語」に取り上げられている。「！」をつけずにはいられない驚き、快挙だったに違いない。「四賀」を「ふるさと」、「福寿草」を「はな」と読ませたい気持ちは分かるが、このルビは無理があるのでは。

・ぐずついて降りそうで降らない曇空咲きかけあじさい雨を欲しがる

中途半端な天気。降るなら降ってくれと、咲きかけの紫陽花なら声にしたいところだろう。それはまた作者の心でもあるか。

・胸や腰を強調させた女の子　好きなマンガの嫌いな部分

マンガの女の子が、胸や腰を強調させて描かれていることへの違和感。「嫌いな部分」とだけ言っているが、そういう描かれ方をされる社会の構造みたいなものも感じているのだろう。

・生活者　答えはとってもシンプルでお金が必要だから働く

・ボッチとか既読スルーとか言われても　孤独の受容は生のテーマ

生きるためにはお金が必要。だから働いて稼ぐ。仕事と本当にしたいこととは別。働きながら本当にしたいこともする。一人であること、一人になろうとすること。孤独を受け容れるところから「生きる」が始まる。明確な主張が未来を感じさせる。

私と短歌との出会い 195

蒲原　清美

手術をしなければいずれ車椅子になるとの診断に覚悟しかなく、医療の進歩を信じ頸椎の前方固定術という恐い手術を受けました。平成二年のことです。

術後の痛みと辛さに悶々と日々を送っていました頃、高二の娘がＰＴＡよりの短歌教室の案内とやらのプリントを差し出しました。先の定まらない逆境におりました私は、少し心が動いたことを覚えています。

このままではいけない、何かやらなくてはの思いにふらりその教室へ行ってしまったのです。平成四年のことです。

短歌を作ったこともない無学な私が……。初対面の山村金三郎先生の第一声「あんた偉いなあ」でした。その御言葉にどれだけの意味が込められていたのかは考えずに月に一度の例会に参加することとなりました。支障なく勤めを続けられていたならおそらく短歌との出会いは無かったでしょう。

先生は例会の都度、文法の出来ていない私に五段活用を黒板に書き熱心に指導して下さり、先輩歌友に申し訳なく恥ずかしい思いをしたものです。一時間の姿勢の辛かったこと、今は懐かしく思い出されます。

落ち込んで帰る月、気分よく帰る月を繰り返しつつそれから四年後、平成八年に地中海に入れて頂くこととなり、今に到っております。その頃には頸の辛さも随分と軽減しておりました。

勤めに出ることを諦め、家で内職を始めました。余暇は常に本を読んでおりました私でしたが、余暇が無くなり読書というものを諦めました。

ゆっくり、じっくり本を読むことが今の私の憧れです。六年前に再び頸椎の手術を受ける羽目となり、電子辞書と『甲虫村落』を持ち入院、院内の図書も利用致して苦しい乍らも贅沢なひと月余りでした。

夫は暇さえあれば本を読んでおります。決して怠け者ではありませんが、そんな夫との会話の中に光る言葉を見つける時があります。扇風機もストーブも私の方へ向けてくれる夫、学び得なかった二人の日常を短歌に紡いでおります。

還暦のクラス会でのこと「あんたはいつも本を読んでいた」と、思いがけない男友達から聞くとは。思えば啄木を始め山本有三、川端康成、夏目漱石などを、娘時代にはベストセラーは逃さず松本清張など乱読していたことを思い出します。遥か昔の自由な頃のことです。

私に短歌との縁を結んでくれた娘が小学三年生の時に、絞扼性イレウスを患い生死をさ迷いました。開腹手術を受けた時には腸が六十糎壊死が進んでいたのです。

兄と夫が神社へ私の命乞いに炎天下お百度参りをしてくれたとのこと、後に知りました。周りの者も神に縋るより他なかったのでしょう。初めてベッドを下り鏡に向かった時の私の驚き、あまりの変貌に息を呑みました。こんな私を夫は朝晩見舞ってくれていたのか、この時の苦しみ哀れは今思い出しても胸が疼きます。

生かされました。一筋のうどんが喉を通ったのです。

今は心豊かな歌友とともに白子れい先生の濃やかな御指導に歌を学んでおります。

月々の例会にいそいそと出かけ、全ての出会いを大切にと思う歳となりました。まずは師の安寧を心より願いつつ――。

夕暮れに思う人生

松崎健一郎

小林能子歌集『計算尺とゴジラ』からすぐれたよい歌だと思ったものを四十首ほど抜き出してみた。すると、死をめぐる作品が十五首ほどあった。三分の一を超えている。死を直接的に詠んだものもあれば、亡夫の思い出とか墓をめぐってのこととか戦争とか、どこかで死とつながるものを含めての数だ。

1亡骸の御輿は香るジャスミンの御簾揺らしつつわが前を過ぐ
2ひつそりと夕闇せまる部屋にゐて遙かの声にきみの死を聞く
3朽ちはてし塔婆ふぞろひの墓石がばらばらに立ちわれらを待てり
4雪原に墓標（はかじるし）もなき戦友の誰彼思へば墓は要らぬと
5わが里は大家族にて父の亡き子らのさみしさに気づかず我も

1は亡骸を載せた輿が目の前を過ぎるバンコクの光景。2は韓国に行ったとき韓国人の友の死をその夫から不意討ちのように電話で聞かされた驚きを詠んだものだろう。3は現代ふうに整理されていない家の墓地に行ったときのことだろう。かつて墓は田舎ではこんなふうであった。4は、3と一つづきの歌群に入っていて、生前、墓は要らぬと言っていた父であったことを思い出している。墓標とは、ある人間の生があり、その死を悼む人がいることの証しである。5は、作者の夫が亡くなったあと、子どもたちはさびしかったであろうに、大家族のなかで育った作者はそれに思い至らなかった、と詠んでいる。育った環境は自分で気づかないうちにものの感じ方や見方をかたちづくるものだ。

こうして五首を見てくると、作者の人生がおぼろげながら浮かんでくる。アジアへ（たぶん仕事で）行くことが多い、父は戦争で生き残って帰還した、夫は子どもがまだ小さいうちに亡くなった、などである。

死は、ひとをおのずから厳粛にさせる。そのことが死に触れた作品をいいものにしているのだろう。

夕方を詠みこんだ歌も印象に残るものが多い。

6ぽつかりと赤い夕陽が風船のごとくタマリンドの梢に浮かぶ
7あの日より無我夢中なる四十年もつかの間にして静かな日暮れ
8墓を洗ひしづく拭ひゆく子のしぐさ見てをれば日は山にかたむく
9台場跡にそそり立つタワーマンションの窓とふ窓に燃ゆる夕焼け

6はバンコクの光景。「風船のごとく」という比喩が効いて

いる。夕陽の赤さが目に浮かぶ。タマリンドは熱帯の高木。

7は、作者が夫の亡くなってから、思えば無我夢中で生きてきた四十年だった、しかし振り返ればいつでもつかの間にも思える、と感慨を詠んだ。人生は振り返ればいつでもつかの間だ。「静かな日暮れ」に作者の現在があらわれている。「あとがき」によれば、作者は一九三五年（昭和十年）生まれ。二〇一八年（平成三十年）で八十三歳になる。その「今年、夫が逝って五十年になる」とあるので、この歌を作ったのは十年前、作者七十三歳のときだ。その四十年前、三十三歳のとき夫に死別した。

8は、父のいないさみしさのなかで生きた子どもたちも成長して、いまは父の墓を洗いしずくを拭うまでになったことを詠む。作者はそういう子のしぐさを頼もしい思いで見ている。「日は山にかたむく」で作者は時間の流れを感じている。

9は勝海舟が築いたという神奈川台場跡地の現在を詠んだ。無機質に思えるタワーマンションの窓という窓に燃える夕焼けが映っている。そこにも命が見えるのである。歴史と変化、というものを感じさせる。

ところで、作者は茨城県の昔話採集という民俗学の大きな仕事をしている。たとえば、鶴尾能子編『茨城の昔話』という作品は作者（鶴尾＝小林能子）が土地の人たちを訪ね、じっさいに昔話を聴いて文字にしたものだ。貴重な労作である。採話数は計一二九話にのぼる。『茨城の昔話』の発行は昭和四十七年（一九七二年）になっている。その「あとがき」には「思えば当時家事のひまひまに子どもを背負って、落穂拾いにも似た採集のあゆみでした」とある。こうした執念にも似た作業や生活を背後にかかえての採話の仕事であった。『高萩の昔話と伝説』という作品も鶴尾（小林）能子が中心的な役割を担ったはずだ。その昔話採集について詠んだ歌がある。

10録音機抱へ子をつれ村々を巡れば手機（てばた）の女にも会へり

11浜街道北に向かひて幾たびかゆけど勿来の花は見ざりき

12「赤井」のリール・デッキと吾子をリヤカーに浜街道を歩きしも秋

10は「録音機」と「子」とを不可分のセットとして村々を昔話採集のために巡ったことを詠んだ。11は、陸前浜街道を北に向かって歩いたが「道も狭（せ）に散る山桜」の勿来の関の花は見なかった、と詠む。勿来の関は福島県に入るので、そこまでは採集の足を伸ばさなかったのである。12では録音機が「赤井」のリール・デッキであることを言う。このリール・デッキと「吾子」とはここでもセットであり、リヤカーに乗せられている。作者の形相は真剣なのにどこかユーモアがにじむ。作者二十九歳から三十三歳までの仕事であった。

13ゴジラ抱く兄にもたれて妹も眠るか父にさらに似てきて

14思へば君の数多のものを手放しぬ　計算尺の一本を残し

題名の『計算尺とゴジラ』はこのような歌から来ている。

13は父（作者の夫）を亡くしたまだ小さな兄妹を詠んだ。「父」（夫）に似てきた幼い娘に夫の面影を見ている。14は夫の残した一本の計算尺が形見の品となってしまった、という歌。生前の夫の仕事や人間を計算尺が思い出させる。

以上書いてきたが、歌の背景の説明がないので、状況が分からない連作の作品も多い。これは読者に不親切である。また、連作の一首一首の独立性が弱いところも気にかかった。

なお、本歌集は選歌、編集、装幀から題名に至るまで久我田鶴子の手になっているとのことだ。センスのよさが光っている。

■小林能子歌集『計算尺とゴジラ』批評

人の心に寄り添う歌

奥田　陽子

大先輩である小林能子さんの歌集を初めて手にした時、まずタイトルと装幀の新鮮さに心惹かれた。関西在住の長かった私は、小林さんとの接点がほとんど無く、わずかに、若くして初期の合同歌集に名を連ねた方と知るのみだった。今回、歌歴の長い著者の歌を一冊にして読むことのできる幸せを思った。

歌集を読み進めると、どの歌も穏やかであたたかく、リズムの柔らかさと共に心に入ってくる。タイトルは家族への愛を表したものだが、そこには夫君の死という悲しい事実があった。

・癌告知うけとめし君の耳もとで聞きし夜更けのテネシーワルツ

・病室に初めて見舞ふ子は父を見つめつつゴジラ手放さず居る

・思へば君の数多のものを手放しぬ　計算尺の一本を残し

・倚子の上に置かれしままの作業衣を手に取れば白き砂こぼれくる

突然の癌告知を受け、手術を受けねばならぬ夫。病室でもゴジラの玩具を手放さない幼い子供。多くを手放した中で残した計算尺は、夫愛用の品であった。夫も手に触れたであろう白い砂。生と死を分けるものの厳しさに、慟哭が聞こえるかのようだ。しかし、この悲嘆の淵から立ち上がらねばならなかった。故郷へ帰って、発展途上国からの技術研修生に日本語を教える仕事に就く。そして、二人の子供を育てあげたのであった。人生の基軸となった仕事の歌は、巻頭を飾っている。

・すさまじき着陸音に覚悟決め四月炎熱のタラップ下る

・戦闘の壁画は爛れ木の枝に旭日旗を認む　悲しみ吹き上ぐ

・森の色に染めし衣の僧の列　花マンゴーの街を過ぎゆく

・遣唐使の北路と憶へば「長征」の道にてもあり西安ちかづく

・作業帽かぶりお喋り絶え間なき彼女らが猫のシャンプーを練る

主にタイでの海外勤務と海外出張、旅を詠ったものである。初めの歌は、まさに海外赴任の覚悟の歌。美しい海岸線をもつタイ南部のマナオ湾では、真珠湾攻撃と同じ日に空軍基地を巡る戦いがあった。戦死者を深く悼んでいる。タイでは王室と仏教への尊敬の念が厚い。僧侶の衣は墨の色ではなく森の色なのだ。北京から西安への旅の途上では、重層的な歴史をもつ地で

思いを深めた事だろう。最後に挙げたのは、この歌集には珍しい仕事現場の歌。ベトナムでの工場視察だろう。眼差しが優しい。どの歌もいきいきとしていて、仕事の充実感が窺える。著者が今日まで日本語普及の仕事をしてきた事を知り、人一倍仕事に熱情を傾けてきた人だと考えていたが、東日本大震災後の福島の歌に出合って、さらにその思いは強くなった。

・現地報告聞くわたしにもできさうなドレスタオルの販売協力

・四年目のたより短く元気ですとおとなびし笑顔の写真を添へて

・希望を担ふ東北ユース管弦楽団（オーケストラ）いまマーラーの「巨人」に挑む

・一面の菜の花　連翹　木瓜　桜　しづかなる桃源郷の入り口

・「気兼ねなくみていってくなんしょ」と福島の花の案内人の優しさ

若い日から続けてきた民俗探訪での出合いか、あるいは仕事上の関係なのか、福島には以前から縁があった事が解る。しかし、誰もが同じように出来るとは限らない。その行為は、仕事によって培われた面も大きいのではなかろうか。

東南アジアからの技術研修生には、単に日本語を教えるのではなく、その生活にもそして何よりも個々の心に寄り添う事が不可欠なのであろう。福島の歌には、この「寄り添う」という姿勢がみられるが、著者にとって、支援はごく自然な事だったのではと思われる。支援を続け、「忘れません」との思いが込められていて、抽出したどの歌にも心打たれる。そして、何も為し得ていない筆者には眩しい。

原発事故後に訪れた花見山。「花見山」は福島市の花の名所で、春には多くの花が咲き競い桃源郷と言われている。歌には烈しい言葉はひとつも無く、花の名をあげて美しさを讃え、方言を巧みに取り入れて人の優しさを言う。けれども、自然の美しさは、それに反比例するかのように、原発事故の現実を思い起こさせるのではなかろうか。歌からは静かな悲しみが感じられる。

一冊を通して、著者の歩み、生き方が一筋の流れのように見えてくるのだが、その中で、人の心に寄り添うという事を考えさせられたのだった。

・踊るごとき興奮はわが十代に　かの「鉄の歌」〈一夜百首〉

伝説

・鉄工場訪ぬる日あり諳んずる「掌」のうた、鉄工のうた

著者は、早稲田大学短歌会での石本隆一・小野茂樹の縁で、「地中海」に入った。師の香川進をうたい、敬慕の念は深い。著者にとって、歌がどんなにか大切であったかを思わせる。「地中海」創刊から五年後の一九五八年に出た合同歌集『群』の中に小林能子の名が見える。そして、香川進の、「巻末に」では、「小野茂樹、小林能子などもやがて学業を了え、社会の苦難のなかに入ってゆくであろうし、」という一節がある。この時から、はるかな時間が流れた。『計算尺とゴジラ』の背後にある厖大な歌群を思う。そして、この一冊の後からも、小林さんは沢山の明るく豊かな歌を作っていかれる事だろう。それを願っている。

憧れの世界

牧　雄彦

著者、船田敦弘の第三歌集だが、残念なことに遺歌集となってしまった。歌集名となった第一章「平城讃歌」では、二〇一〇年の平城京遷都千三百年祭を踏まえて詠んだ「平城京晩景」と、奈良のさまざまな寺院を訪ね、誰もが知っている東大寺や薬師寺、唐招提寺などを含む十八の寺院をテーマにした作品が並ぶ。そして各地の城を詠んだ第二章「天守閣の歌」。また第三章は「神々の苑」、第四章は「仏陀の道」、最後に「かなかな」という構成だが、なんといっても第一章に力点が置かれていると思う。紙数に限りがあるので第一章と、私が最も興味をそそられる第三章、第四章に絞ってみたい。様々な歴史的な土地や建造物を訪ねるにあたって、作者のまことに豊富な知識と事前の下調べ、それに現場での説明文の読み取りなど、通り一遍の寺院参拝ではない、思い入れの深さには感じ入るばかりである。

師、香川進は、何かテーマを決めて徹底的に詠み込むことを勧めたが、船田敦弘もその言に従い、こうして日本の寺院や城など、またシルクロードや仏陀の歩みなど、歴史、文化について深く考察し、それらの内面に迫ろうというのが終生のテーマとなったようだ。

私が地中海に入った昭和四十九年当時は奥田清和支社長のもと、船田敦弘や田土成彦、松本有司らそうそうたるメンバーがいて、日の伴グループも合流しての歌会では活発な意見が飛び交い、元気いっぱいだった。中でも船田の静かなもの言いには説得力があって、彼の学識には一目も二目も置いたものだ。船田は香川進や桃原邑子らの論考をまとめて手製の冊子を刊行したが、これらの内容を見ても彼の探求心には感心するばかりだった。私はこの「平城讃歌」を読むのに大変な時間を要した。つまり作品を理解せんとするのに、どの章も歴史や土地の名など、知らぬままに飛ばして読むわけにはいかず、浅学菲才の私は図鑑や広辞苑、インターネットのウィキペディアなどの世話になるという仕儀となり、なかなか先に進まなかったのである。

① 遷都祭近づく宮居の空ゆ降るヒイチブリートルリトルリートル
（平城京晩景）

② 正倉の前に憩へる鹿なればせんべいくはず草食べゐる
（　同　）

③ 法師蝉おーしつくつく一曲を声明として誦し了へて翔ぶ
（薬師寺）

④ 堂のには十字のどくだみ立ちゐたりわが戒律のこころ問ふがに
（唐招提寺）

⑤ 売られゐるにほひゆかしき線香の瓊花をけふの家苞とせむ
（揚州の花）

⑥ 聖武帝より大僧正に任ぜらるる恭仁京時代の行基はゼネコン
（喜光寺）

⑦ 本尊の菩薩立像天平の世より伝へし朱きくちびる
（法華寺）

⑧ 天平の楊柳観音の怒り顔わが持つデジカメ睨みて立つは
（大安寺）

印象深い作品の多くから作者らしいと思われる作品を抽いた。①は説明するまでもなかろう。この一首の面白さは下の句のヒバリの啼き声のオノマトペである。ヒバリの声だけの下の句はまことにユニークだ。作者は時にこのような試みをして楽しんでいるようなところがあり、そういう肩肘の張らない作品が私は好きである。⑤の「瓊花」というのは紫陽花に似ているが別種とある。鑑真和上の故郷、揚州の花でごく限られたところに数株しかないという。四～五月に咲き、芳香がある。⑥の行基は奈良時代の僧で、聖武天皇から日本初の大僧正という位を賜った。仏教を説くかたわら寺院、道場、溜池や堀、橋などのインフラ事業に尽くし（まさにゼネコン）、生活困窮者のための「布施屋」などを作って社会事業にも力を注いだ。この作品のように「ゼネコン」とか「デジカメ」などという言葉が時々使われているのは奇異に感じられるかも知れないが、私は効果的に使われていて面白いと思った。

「天守閣の歌」には日本の名だたる二十六城が登場するが、急ぎ第三章、第四章へ進もう。ここに出てくる多くの国々や町村の多くはかつて私も訪ねたところであり、特にインドには足しげく通っただけになつかしくこれらの作品を読みながらその土地のことを思い出すのであった。

① 見の限り麦の畑は黄の絨毯師の影孤つ原に入りゆく
（太陽のある景・トルコ）

② 椰子の実の干したるを購ひ食ぶれば吾を育める隠岐の干し柿
（エジプト）

③ あつけらかんのインドの葬り今世紀の地球を浄めよ悲願のガンジス
（インド）

④ 釈迦説法生きよの教への伝はらず日本の寺は死者に向きたり
（同）

⑤ 菩提樹の天蓋の下の仏足石ヒンドゥー教徒の祈りはげしき
（同）

⑥ サンチーの石塔にさへ木の茂り釈迦はいづこに流転のインド
（同）

① の作品については脚注に目を通してほしい。②、エジプトで故郷の隠岐を思うところ、心に迫ってくるものがある。船田が歩いたブダガヤ、ラジギール、サンチー、みな懐かしい。③はバラナシで詠んだのであろう。私もここでガンジスを見て「人間の生と死」を考えた。⑤では仏陀の仏足石に五体投地をしているのか、ヒンドゥー教徒だという。作者はこうして釈迦の歩いた道を辿って、何を感じ、何を考えたのだろうか。平城京といい、仏陀の道といい、船田敦弘にとってはまさに「憧れの世界」だったのであろう。

わが魂はかもめとなりて

浜谷　久子

地中海大阪支社、安田静雄、のち牧邦雄支社長のもと、重きをなす一人として、船田敦弘は、香川進代表の意向に沿って昭和六十年天平グループを創設。大阪支社より浜谷が参加することとなり、のち長く指導を受けることになりました。

創設時、清子夫人が参加。夫妻が率いるグループはメンバーも増えていき、活発さが満ちていきます。

個々の自由な活動の一つである有志による香川進作品の勉強会も、作品の表現の推移など、船田敦弘の緻密な研究からの助言を拠り所に、詳しく作品を見ることができました。

香川進代表への尊敬に曇りなく、師として仰ぎながら父性をも重ね見る眼差しが船田にはありました。「地中海」での作歌とともに、香川進研究に込められた精魂は、その研究文献からも周知のことであろうと思います。

『天平空間』、『装飾古墳』ののち、自製冊子を元にこのたび『平城讃歌』が出版されました。地名等の漢字も正確な確認がなされ、付記が作品の邪魔にならぬよう添えられ、読者によく伝わるよう配慮された編集は、旅も短歌の道も同行された清子夫人の思いが尽くされたものでした。

『平城讃歌』は、古代と現代の時間空間をゆったりと往き来する作者の魂を思わせます。古代舞台に、紛れもなく現代を生きる作者がいて、二つの空間を「歌」によって結びつけます。読者はすんなり古代の中に取り込まれていきます。

・さくら花アーケード然と大極殿おほひてことほぐ自慢の写真は

・正倉の前に憩へる鹿なればせんべいくはず草食べゐる

・薬師寺のビューポイントなる大池にわれもまじりて一会の構へす

・堂のにはに十字のどくだみ立ちゐたりわが戒律のこころ問ふがに

・おほてらのまろきはしらを照らしたる千年の月霧のなかなる

・中興の覚盛上人の蚊を追へるこころをよしとしうちはを苞に

船田敦弘の時間をかけて巡り歩いた、祖なる地。出立ともなる第一歌集『天平空間』には作者の魂の礎が記されていました。故郷を離れざるを得なかった身は、帰る術の無い故郷を恋い続けたのではないでしょうか。『地中海の104人』で、故郷を詠う浜谷歌集へは、「いつか今住む土地が故郷になるだろう」と記

されていますが、気付けば現実のものとなっていました。しかし埋められない空洞があるのも確かです。「故郷」は、訪れる土地ではあり得ても帰る地ではなくなっています。船田敦弘は自身の身を重ね見ていたのではと思います。

故郷を発ったときの一人、妻を得ての二人、夫人の御母の葬儀の時の子息四人からなる十七人家族が揃った日、そしてさらなる日日。家族を得る至福の感慨の中でなお哀しく故郷が心を離れることはなかったと思われます。

・奈良の都を第二のふる里となしてよりやくも号に聴くふる里訛り

・故里の「隠岐の海」なり場所ごとにわが魂はかもめとなりて

・カッパドキア杏子の黄実を割りたればわが少年の舌が悦ぶ

・祖の国にかへるごとくに過ごしたり地中海トルコの旅の旬日

・椰子の実の干したるを購ひ食ぶれば吾を育める隠岐の干し柿

・ひびき灘の温泉に聴く波の音少年の日のさざえのにほひ

夫人のあとがきの中に、「かなり強い望郷の念を、口にこそ出しませんでしたが心の奥に持ち続けていたことに気付きました。」の文章があります。『天平空間』の作者あとがきにもあるように、大阪に教員として赴任一年にしての母上の他界以後、故郷喪失の思いから、奈良を、第二の故郷にと決意し、住まいを構えます。しかし年月とともに深まる望郷の念やみがたく、祖の地は、人間の根源はと、思いを馳せていくことになったのではないでしょうか。

また同時に、師香川進という存在の温もりへの憧憬も大きかったと思われます。

・夜に白く浮きけむ原初のピラミッドパピルス断面のままの形ぞ

「断面」は、香川進の作品に折々見られ、船田敦弘が注目し惹かれた語の一つであったと思われます。

・久しぶりに機械を見にきしわれら二人を冷たく映すはがねの断面　（香川進『氷原』）

・冴えとほる断面を見れば古代よりはがねは悲しく歴史に沁めり　（同『湾』）

・吊られたる鉄の断面にわれの頭がそのいろくろきものとし映れる　（同『湾』）

また、特に本書「シルクロード」の章で見られる、

・シルクロードはた玉の道　求道の道この原往きしパトスが乾く

等の作品の「乾き」には、多く詠まれた香川進の「乾き」を感じます。共に「死」と隣り合わせの存在として詠まれたように思います。それは、根源に繋がろうとする強靱なものとして。旅は、香川進の一語に至る道でもあったかと思います。

船田敦弘の命の根源を求める旅は、師香川進に導かれる旅であり、自在な交感の旅となっていたのではないでしょうか。血肉となっていく香川進の歌の一語一語をかみしめながらの。香川進に前田夕暮が存在するように、船田敦弘に香川進が在ることを思います。

船田敦弘の時間と思いを見守り、共に永遠を見つめようとする清子夫人の眼差しに包まれて、本集が成りました。こののち清子夫人の歌集がまとめられる時、一対の歌集となって、魂呼び合う遥かなる時空が生まれることと思います。

船田敦弘先生、お教えとお見守りを有り難うございました。